日刊 動労千葉

81.4.28

No.727

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

3月ジェット決戦ストに終始敵対した『本部』スト破り集団

デマ情報『動力車千葉』第2号批判（そのろ）

われわれは、この間、動労「本部」スト破り集団のデマ情報「動力車千葉」（第二号）に対する批判を二回にわたって行ってきた。本号では、五日間のストライキへの敵意をむき出しにした誹謗と中傷とデマに対し、逆に彼らがわれわれの闘いに終始敵対し、いかなる妨害を行ったのか事実をもって反論する。そして、さらに、八一春闘を「ストなし春闘」として裏切りを卒先して行った彼ら「本部」反動分子の実態を明らかにし、彼らをさらに追いつめ、動労大改革を一層強力に推進しようではないか。

五日間のストにとまどい、右往左往した「本部」スト破り集団

動労「本部」スト破り集団は、『動力車千葉』（第二号）において二月十九日以降のわが動労千葉の助役機関士導入阻止闘争の爆発と引き続く五日間のストライキに全く動転してしまい、とんでもないデマとデタラメを書きつらね、何んとか自分達が行なった反労働者的スト破り行為を隠蔽しようとしている。

すなわち、わが動労千葉が二月二七日の支部代表者会議で、①三月二日のジェット燃料列車の指名ストを決定した。②にもかかわらず、三月二日緊急支部代表者会議を開催し戦術拡大を決定した。③この戦術拡大の決定で組合員がとまどいを感じ右往左往するばかりで、全く空気の入らない情況を呈していた。④このことから判断するならば、……どく一部による政治主義的な労組の私物化をさらけ出したといえる。⑤又、この戦術拡大の理由は、本腰を入れて闘う気持が無い腹の内を反対同盟に見抜かれ追及された結果である。⑥なぜならば、このことは、二月二八日付「日刊動労千葉」で「残る三日間支部執行部の……指導のもと一糸乱れぬ……」という文面でもハッキリしている。等々。

このように動労「本部」スト破り集団は、何を感違いしたのか『日刊』の文章まで「動労千葉が五日間もストライキをやるはずがない」ときめ込んでいた自分達の願望に合せて勝手に読み違えて解釈していたのである。

なるほど今にして思えば、「動労千葉は闘うはずがない」と思い込んでいた彼らの動き・心情が五日間ストライキの中でハッキリと出ていたのである。

つまり、三月二日と四日の夜には、明けがたまで「もう闘争は終りだろう」とか「明日もストをやるのか」などという〝いやがらせ電話〟が集中してかけられてきたことからも明らかである。

しかし、なによりも「本部」スト破り集団が、「動労千葉の急拠の戦術拡大?!」といいふらす根拠となっている二月二八日付『日刊』の珍無類の白を黒といいくるめる解釈である。

三月ジェット決戦スト突入を前に動労「本部」スト破り集団がいいふらすように「三月二日の一日だけのストライキ」などと思っていた動労千葉の組合員は誰れ一人としていないのである。

動労千葉の底力をもって三月ジェット決戦ストを打ち貫き、八一春闘の突破口を切り拓き、国鉄労働運動の戦闘的再生と動労大改革を一層推進する決意にもえて、一三〇〇組合員は、満を持して五日間ストライキに決起したのである。事実は逆で、三月六日、総武本線の一部の列車を除いて千葉鉄管内の全列車がストップしている中でジェット燃料列車のみが助役機関士と共に「本部」スト破り分子によって卒先して動かされていたのである。まさに、三月ジェット決戦五日間ストライキにとまどいを感じ、右往左往していたのは、動労「本部」スト破り集団自身であったのである。

八一春闘の「ストなし」に卒先協力した「本部」反動分子

三月ジェット決戦ストに公然たる敵対・妨害を行なった「本部」スト破り集団は、八一春闘決戦段階においても「歴史的な国労共闘」などと「歴史的な裏切り」を卒先して行ないつつ、八一春闘の「ストなし」収拾へ卒先協力したのである。「国労共闘」に名をかりた裏切りをもって動労組合員を引き廻し、不満を「国労・総評富塚」「金属労協」へとそらせ、自らは、国鉄当局の三五万人合理化への協力を行なっているのである。

「本部」革マル反動分子の反動性、反労働者性は満天下にさらけ出されつつある。

われわれは、「本部」革マル反動分子を一掃し、今こそ、動労大改革運動を全国的に展開し、戦闘的国鉄労働運動再生をかちとろうではないか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！